

ふくよか

2022春号

■長崎県病院企業団本部
■令和4年4月発行

目次 CONTENTS

P2...企業長より

離島の人口減少を考える【その三】

P3...定年を機に挑戦 日本一周完歩

川良元副企業長より近況が届きました

P4...退職者あいさつ

6名の方からお言葉をいただきました

P6...島原病院経営企画室活動報告

経営企画室の取り組みをご紹介します

P7...きざり☆発見

～宮岐病院 医療局 内科
医師 森 源喜 さん～

P8...Break Time

Break Timeに想うこと

vol.

31

離島の人口減少を考える【その二】

企業長 米倉正大

アルファ株、デルタ株、オミクロン株と続き、3年目のコロナ禍に入った。感染の広がりが速い割には、重症者が少ないオミクロン株の感染状況に、少しの安堵感を持ちながら、3回目のブースターワクチンに頼らざるを得ない状況は続いている。

さて、2017年の春号と夏号の2回にわたり、離島の人口減少について書いた。あれから5年が経過した今、離島の人口は、予想通り着実に減少の一途をたどっている。この間、国も地方自治体も一体となって人口減少の防止に努めてきた。またそれなりの税金も投入されてきた。そのかいあってか、幾人かの若者はIターンやUターンで、離島に住み着いている。しかし、高齢者死亡の自然減に比べると焼け石に水である。2月初めの新聞には、昨年の長崎市の人口減が全国でワースト2とあった。長崎県

は離島ばかりでなく、県庁所在地の長崎市が、人口ダムの機能を果たせていない状況である。また全国では、この5年間で15歳から64歳の労働力人口は226万人減少したという報告がある。

日本全体で人口減少がある中で、どこかの地方だけが人口増加するとは考えにくい。そこで我々医療を提供する側としては、いい政策が行われれば、いつかは人口減少がくい止められるであろうという甘い考えを捨て、この現実をしつかり受け止め、予測された人口減に対応した医療・福祉の提供システムを考える時期に来ているのではないだろうか。

国土交通省は「2050年ごろには日本の人口は1億人を切り、65歳以上の高齢者は40%を越す」と発表している。予測にあたり不確定な要素は、ほとんどないと言われる

ており、現にこの報告書が発表された2011年から10年間、現時点まで予測どおり人口は減り続けている。2050年といえ、わずか30年足らず後であり、私たちの孫の時代である。ちなみに、長崎県病院企業団が医療を提供している離島人口は、2040年には約11万3千人から約6万9千人まで減少し、高齢化率は50%を超えるという予測になっている。ほんの20年足らず先のことである。今、企業団病院で勤務しているかなりの職員がまだ働いている時期でもある。

一方、報道によると北海道のある町では、ここ20年間で人口が7千5百人から8千4百人まで増加したという。この町長は「我が町は1万人程度が限度であり、ほぼほどにまばらな『適疎』がいい」ということで、適疎推進課を設けてスタートしたそうである。そういう意味では長崎県

の各離島にも将来に向けてどれくらい人口がいれば、『適疎』なのか、一度考える必要があるであろう。

ちなみに、人口に対しての医療機能は、地理的な条件やその他複雑な要因はあるものの、人口約40〜50万人に一つの救命センター、人口5千人に一つの病院、さらに2千人に一つの有床診療所というのが、大まかな基準である。我々長崎県病院企業団は、国が出している地域医療構想に沿って、また長崎県の離島の『適疎人口』を考え、医療提供の規模を決める時期に来ているの言うまでもない。まさに病院企業団で数年前から掲げているスローガンである「縮小の時代を生き抜く知恵と勇気」を実践する時である。

さらに、離島・へき地の人口減に伴い、医療従事者の不足という問題が、最近特に顕

著になってきた。医師不足については、これまで大きく叫ばれてきたため、全国の大学医学部で地域枠という医学生を育て、長崎県では毎年20人ほどの医師が育ち始めている。このままていくと長崎県では数年後には離島やへき地などの医師不足はほぼ解消される見込みである。

しかし最近では、それ以外の職種、特に薬剤師、看護師、介護士、看護助手、事務員などの不足が顕著になっている。これらの領域の職員を増やすことは容易ではなく、少ない人材で医療や介護の質を落とすことなく続けていくには、いかに効率よくやっていくかということも考えないといけない状況になっている。

以前、長崎県は『小さな楽園の拡大連携』というプロジェクトを進めていた。今はなりを潜めているが、過疎地域の人口減を受け止め、住民が主体となって集落の維持・活性化に取り組む「小さな拠点づくり」を支援する仕組みである。つい最近、旧中対馬病院の跡地約1万2千平方

メートルを対馬市が買い取り、集合住宅地にすることに決まった。まさに、コンパクトタウンの構想にぴったりである。

私は、離島・へき地の人口減少を乗り切るには、コンパクトシティやコンパクトタウンが効果的だと思っていることを、前回の人口減少対策でも問題提起してきた。今後、一層の高齢化が進んでくる全国の離島・へき地では、散在する集落では訪問診療や訪問看護はもろろん、電気・水道・ごみ収集などのインフラ維持が難しくなることが指摘されている。何よりも住民同士のコミュニケーションが疎遠になれば、医学的側面から言うと認知症も多くなる。旧中対馬病院跡地の活用を通して、小さなコンパクトタウンがきっかけになって、全国に先駆けてのモデルになることを期待したい。



定年を機に挑戦 日本一周完歩

～元副企業長 川良 数行 さんより～

北海道 宗谷岬にて



昨年11月下旬、日本一周を歩き終えました。60歳の定年退職を機に、平成29年4月、九州一周から始め、時候のいい春と秋を中心にエリアを区切った完歩です。途中、2年間の再就職やコロナ禍に伴う回避があり、5年近くかかりました。

ルートは、海沿いの国道を基本とし、本土の四つの端（佐世保市の神崎鼻、鹿児島県の佐多岬、北海道の納沙布岬、宗谷岬）を巡り、累計約1万5000キロ、290日（1日平均約37キロ）の旅でした。

最初はテント泊と民宿泊などを織り交ぜていましたが、途中からはテント泊をやめて宿だけにしました。各地の風景はもろろん、車では気付かないような所も目に焼き付けることができました。路上で出会った人から飲み物を頂いたり、また、あいさつを交わすことで力ももらいました。

苦労したことは、足の裏のまめ、天気、それと宿の手配です。雨の日は傘を差し、防水服を着ましたが、横なぐりの雨の時はかなりぬれ、靴の中もじゅくじゅくでした。幸い、歩けなかったのは台風通過時の1回だけでした。

退職に際して心遣いいただいた方や、各地で温かく対応してくださった方に支えられて完歩できたと思っています。感謝の気持ちでいっぱいです。そして家族の理解にも。



五島中央病院 事務部長 藤野 弘幸

令和2年4月から2年間、五島中央病院で勤務させていただきました。

国立病院機構での経験を長崎県病院企業団で少しでも活かせたらという思いで、竹島院長とともに病院運営に努めてまいりましたが、新型コロナウイルス感染症のまん延により、その対応に追われた2年間でもありましたが、職員の皆さんの多大なご努力により運営できたものと考えています。心から敬意を表します。

五島中央病院の課題は、人口減少など縮小の時代に応じた業務集約化や組織体制の見直しであり、病床利用率を向上させ経営基盤を安定させることにありました。コロナ禍の中で病棟集約を行い病床利用率も向上しています。しかし、非常事態宣言、まん延防止措置などにより就職活動などが大幅に制約された結果、看護師等の深刻な人材不足も生じています。人材確保は喫緊の課題として引き継ぎたいと思います。

竹島院長は、病院の理念・基本方針を見直し、「私たちは地域医療に貢献し患者さんに信頼される医療提供すること。」としました。また、基本方針では「医療人材教育を積極的に取り組むこと。健全な病院運営に努めること。」を追加しました。これは職員が主役となり地域に貢献すること。患者のみならず職員の満足度を高め、健全な経営を目指すことを目標としたものです。病院経営はまさに正念場ですが、職員一丸となって乗り切れるものと信じています。

今般、十分な成果を上げることもなく3月で退職することになり心苦しい限りですが、多くの方々のご協力、ご理解をいただいたことをとても感謝しています。五島中央病院の益々のご発展を福岡の地でお祈りしています。本当にありがとうございました。



上五島病院 事務部長 中村 文彦



このたび令和4年3月31日をもちまして定年を迎え退職することになりました。早いもので入社して41年が経ちました。未熟だった私をここまで育て、仕事の機会を与えてくださった病院に深く感謝しております。そして私を導き支えてくださった先輩方をはじめ、皆さまに心から感謝申し上げます。おかげさまで今日まで勤め上げることができました。振り返るといろいろなことがありました。特に印象に残るのは昭和61年6月に新病院が完成し現在地に移転したこと、平成5年にオーダーリングシステムを導入したことです。どちらもシステム等に慣れるのに時間を要し、遅くまで勤務し大変でしたが今では一番の思い出となっております。

高齢化が進む上五島地区にとって、病院はなくてはならない、あることで安心できる、いわば心の拠り所であると思います。今後も上五島地区唯一の病院として限られた医療資源の中で地域医療に貢献し、さらに発展し続けることを願っております。長い間、本当にありがとうございました。

奈良尾医療センター 事務長 浜町 修子

思い起こせば、高校の卒業式の2日後（3月3日）から、旧奈良尾病院に勤め始めてもう42年経とうとしています。これだけの長い間病院に勤めて、私はどれだけの知識を得たのだろうかと思います。

何の資格も持たない一般事務職員が窓口業務を32年間勤めた後、電子カルテの導入と同時に50歳で財務担当になりました。借方・貸方の違いも解らず手書きの紙伝票から始まって、財務システムで予算を作れるようになるのに人の何倍も時間がかかりました。でも、私は今まで沢山の人の助けられてここまで来れています。上五島病院への異動も大きな転機となり、診療所では得られない知識・経験を積むことが出来ました。そして、私は今、人との出会いで人は成長するのだと実感しています。今まで、私に関わってくださった多くの方々、支えてくれた家族に心より感謝いたします。少し辛くて、とても楽しいお勤めでした。ありがとうございました。

退職者の挨拶

令和3年度末に退職された6名の方からの挨拶です。



本部 看護指導監 高口 眞理子

このたび長崎県病院企業団本部の看護指導監を退任することになりました。8年間にわたり皆様には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。と言いましても、私の使命でありました「人材育成」「人材確保」については未だ成果が見えず、申し訳なく思っています。看護部間の調整役については交流を図り皆様から温かいサポートを受け一体感の醸成はできたと感じております。病院訪問や会議等で和やかに楽しい時間を共に過ごせたこと、また、会議室を各企業団病院に移し視察訪問を兼ねて看護部会議を開催できましたことなど皆様には感謝の言葉しかありません。私は仕事柄、九州管内の転勤を繰り返しておりましたが、在職した期間の中で長崎県が一番長く居た場所になり、離島を含む

企業団病院への思いも一入です。皆様との繋がりとは本部での貴重な体験を今後の人生の中で大切にしていきます。末筆ながら企業団病院の発展と皆様の益々の御活躍を祈念しております。ありがとうございました。

精神医療センター 副院長兼看護部長 山中 利文

このたび、3月末日を持ちまして定年退職の運びとなりました。かえりみますと、昭和62年に就職以来35年の永きに亘り皆さま方のご指導とご厚情に支えられ、勤めさせていただきましたことを心から厚くお礼申し上げます。また、看護師という職業を通じて、多くの方との出会いや学びをさせて頂き、とても意義ある幸せな時間を過ごさせてもらいました。

今後は皆さまからお寄せいただきましたご厚情を大切に、これからの人生を有意義に送りたいと思っております。今後とも変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。皆さま方の益々のご健勝とご多幸をお祈り致しまして、お礼少々退職のご挨拶とさせていただきます。



島原病院 看護部長 田中 静子

私は昭和58年に地元の長崎県島原温泉病院で臨床看護実践能力を培いました。その後は看護教育に興味を持ち、県立佐世保看護学校で専任教員として8年間基礎教育に携わりました。その経験を活かし、再び長崎県立島原病院、長崎県島原病院で地域医療に携わってきました。

平成31年に看護部長に就任した年の冬から新型コロナウイルスという未曾有の災害に看護管理者として「人員、物資、情報」を管理・統括の役割を担い、奮闘した日々を過ごしてきました。また、コロナ禍で延期となっていた病院機能評価3rdG: Ver.2.0も無事に乗り切ることができました。コロナ禍以前もコロナ禍以降も看護管理者の仕事は、「人を育てること」だと信じて行動してきました。幸いにも院内クラスターは発生せず、バーンアウトしたスタッフもいませんでした。

多くの方々に支えられ定年を迎えられることに心より感謝申し上げます。今後の長崎県病院企業団の発展と、島原半島の基幹病院として「島原病院があって良かった」と地域の方に選ばれる病院となることを祈念します。

島原病院経営企画室活動報告

長崎県島原病院 経営企画室(医事係兼務) 溝上 翔太郎

経営企画室とは

- ◆ 島原病院が地域の急性期基幹病院として、急性期医療の充実と経営効率化を両立させる。
- ◆ 病院企業団のモデル的基幹病院として、将来の病院企業団全体の経営的マネジメントの一翼を担える人材(事務職)を育成する。

上記を目的として、令和3年4月1日から院内組織として設立しました。

◆ 構成メンバー

室長…蒲原副院長

室員…小松副看護部長、リハ科井口技師長、河本専門幹(本部次長兼務)、

井上総務課長、財務係伊木主任主事、溝上主任主事(実務担当、医事係兼務)

※看護師、コメディカルが関わることにより病院全体への広がり期待しています。

◆ 活動実績概要

今年度は管理料・加算の算定漏れをなくすことを中心とした取り組みでした。

病院としての管理体制の構築・改善し実際に行っている診療行為等を収益にしっかりと結びつけるために点検強化や運用体制の見直しを行いました。

① 医学管理料等の点検強化(レセプト前点検)

- ・医療機器安全管理料
- ・新型コロナウイルス感染症に係る加算(臨時特例)等
- ・入院起算日の継続・リセット
- ・救急医療管理加算
- ・肺血栓塞栓症予防管理料
- など

② 医療の質向上・収益の増を目的とした提案・取り組み

- ・DPC II 期内退院率向上を目的としたパスの見直し
- ・摂食機能療法の運用提案
- ・肺血栓塞栓症予防管理料の点検強化
- ・退院時リハビリテーション指導料の運用提案
- ・救急医療管理加算の運用提案
- ・査定分析の点検強化

令和3年12月20日に企業団本部にて、島原病院の溝上主任主事より経営企画室の活動報告がありました。



経営企画室の取り組みにより4月～12月で1,000万円以上の増収となっています!!

今後の取り組み

今後は引き続き管理体制の構築・改善に取り組みながら、より医療の質・収益性の向上を目的とした新たな体制づくりに取り組んでいきます。例えば、地域包括ケア病棟の運用方針(どのような症例に対してどのように活用するか。モデルケースの想定。)や、コメディカル部門の質向上(各種指導やチーム支援の拡充。現人員で効率よく実施するための運用体制。)のための検討・提案を進めていければと思います。

実務担当者として

知識としても経験としてもまだまだ足りておらず、反省と勉強の毎日です。大変なことのほうが多いですが、その分、結果に繋がった時の達成感は大きく、やりがいのある仕事です。これからも、多くの方のご指導のもと、スキルを磨いていきたいと思っています。

きらり★発見

Vol.5



彦岐病院 医療局 内科

もり げんき

医長(医師)森 源喜 さん

(企業団採用:平成27年10月)

企業団病院・診療所で働く「きらり」と光る職員を
発見し、インタビューしました。

聞き手:上田副企業長

◆趣味など、自己PRをお願いします。

◇魚釣りが好きで、釣った魚も食べます。彦岐に来て6年が経ち、その前に対馬にも勤務したことがあるんですが、離島では大好きな魚釣りができます。

◆差支えなければ、お名前の源喜の由来を教えてくださいか。

◇兄貴も「源太」で、「源」が入っているんですけど、親からは喜びの源になるようにっていうことで「源喜」とつけたと聞いています。

◆医師になったきっかけは何ですか。

◇7歳の時に長崎大学病院に入院したんですが、母親が入院した病棟の看護師で、母親から採血されたり点滴されたりしたんですが、子供ながら母親の働く姿を見て、医療系の仕事に就きたいなと思いました。

◆内科医ですが、専門は何ですか。

◇消化器内科です。学生の時に自分の手を動かして切除したり、治療したりしたいなと思ったんですが、外科手術と同じように内視鏡でカメラを使って癌の切除とか出来る時代になってきて、是非やりたいと思い内視鏡を専門とする消化器内科の道を志しました。

◆これまでの仕事のなかで一番嬉しかったことは。

◇上対馬病院に勤務した時、内視鏡での癌治療を初めて導入したんですが、地域の方も医療関係者もすごく注目してくれて、こういう治療が上対馬病院で出来るんだってということで、たくさんの患者が内視鏡を受けてくれて、たくさん治させていただいて、自分の頑張りがすごく反映されたことです。

◆自己研鑽として取り組んでいることは。

◇一般的な学会に出席したり、自分の行った手技が動画に撮れるので、それを見返しながら、なぜここはうまくいかなかったのか、ここはうまくいったのかという振り返りは常々行っています。



◆「彦岐から胃がんをゼロにする」というのが信条とお聞きしました。どのようなことですか。

◇胃癌をはじめとする消化管の癌は、内視鏡で早期発見早期治療すれば、かなり根治が得られます。発見が遅れて命取りになる患者をゼロにしたいと思っているので、胃癌をゼロにするというか、消化器癌で亡くなる人をゼロにするというのが正確な言い方です。そのために、たくさん内視鏡検査を受けてもらって、どんどん治療をして、10年後、20年後にこの彦岐で胃癌で亡くなる人、大腸癌の発見が遅れる人がすごく少なくなるような地域になればと思っています。

◆最後に、何か伝えたいことはありますか。

◇元々、彦岐病院でやっていた内視鏡の件数が、胃カメラが1,000件ぐらいで大腸が300件ぐらいだったのが、今は胃カメラが3,000件から4,000件、大腸が1,100件から1,200件と3~4倍の数を実施しています。それを受けられるキャパシティは持っているけど、たいぶ体力的にきつくなってきたかなというところですね。

◆彦岐の良さは何ですか。

◇すごく優しい人が多いなということと、海がきれいだし、魚釣りもできる場所もいっぱいあるし、そんなに田舎というわけじゃないし、いっぱいお店もあるし、食べ物も美味しいし、不満はないですね。

~副企業長より~

内視鏡治療に頑張る森先生、彦岐のため、これからもよろしくお願いします。



内視鏡検査中の森医師



Break Time に想うこと

ふくよかの最終ページBreak Timeを担当して早3年、想えば、本部のKGYさんから「Break Timeは趣味でも何でもいいんですよ、自由にどうぞ」と言われて、今回12回目になります。企業長の巻頭言31回に比べると、まだまだですが、今回はBreak Timeの作成に関することとお話したいと思います。

まず、テーマをどのように選んでいるのかについては、だいたい帰宅時の諫早駅から自宅まで歩いている途中か夜の晩酌時に、何となくパッと頭にひらめいたことを選んでいきます。だから、テーマがお酒に関するものが多いのかもしれませんが。また、お酒が入ってそのまま寝てしまうと、せっかく浮かんだテーマを忘れてしまうおそれがありますので、スマホにテーマだけメモするようにしています。たまに、朝起きてメモしたテーマが何だったかなと思うこともあります。

次に、具体的な内容や文章構成については、出勤時の自宅から諫早駅まで歩いている途中や諫早駅から長崎駅までのJR車内で考えます。朝は頭がスッキリしているせいか、水の流れのようにどんどん文章が浮かんでいきます。つまり、テーマは夜の酔った頭で、内容については朝のスッキリした頭で考えていることになります。

今回、12回目のBreak Timeになりますが、実は、第1回目のテーマである「おんせん 新幹線!」の次に「地名の由来」というテーマを考えていたんですが、まだ、完成していません。このテーマの選定にあたっては、先ほど述べた選定過程とは違い、ある出来事がありましたので、ちょっと紹介したいと思います。

とある日、JRの特急かもめで実家のある長崎駅に向かっていたところ、私の席の斜め前の席に、30歳代ぐらいのお父さんと小学校就学前ぐらいの娘さんが座っていました。かもめが浦上駅に着く前に、車内放送があり「間もなく浦上に着きます」とアナウンスがあり、それを聞いていた娘さんが不思議そうに「どうしてウラカミって言うの」とお父さんに尋ねていました。それを聞いていた私も、幼少期から高校まで浦上地区に住んでいたのに、浦上という地名の由来は知りませんでした。その後、本屋や図書館、ネットなどを駆使して地名の由来を調べましたが、なかなか、これといった結論までは至りませんでした。そういうことで、テーマは選定したのに、文章が完成できないのです。

ちなみに、そのお父さんは、娘さんに何と回答したと思いますか?

実は、回答はしないで、窓の方に向かい他の景色を見るように言っていました。……

それで、娘さんが納得したかは、わかりません。

(文：副企業長 上田彰二)



Break Time⑳号～㉓号

編集後記

この度、人事異動で7名の方が本部を去ることとなりました。お世話になった方々とお別れは名残惜しいばかりです。

ふくよかに関しては編集部として企画調整に携わられた方も多く、特に編集長を務めていただいた上田副企業長には新コーナーの企画や取材、原稿執筆も手掛けていただき、退職される高口看護指導監には創刊号から数々の助言をいただきました。

『ふくよか』は更にふくよかとなり、大変感謝しております。

皆さまの新天地でのさらなるご活躍をお祈りしております!



ふくよか

「ふくよか」の由来

医療人として患者さんに寄り添った会話が自然と出てくるような能力を付けて欲しいとの企業長からの願いが込められています

令和4年4月発行

編集・発行/長崎県病院企業団本部
〒850-0035 長崎市元船町17-1 長崎県大波止ビル7階
TEL.095-825-2255 FAX.095-828-4759
E-mail: honbu@nagasaki-hosp-agency.or.jp
URL: <http://www.nagasaki-hosp-agency.or.jp/>
上記メールアドレスに記事についてのご意見・ご感想を
どんどんお寄せください!



長崎県病院企業団

検索